様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４３７１

研究課題名（和文）パーソナリティ検査における社会的望ましさの影響は何歳から始まるか

研究課題名（英文）How old will social desirability affect psychological test scores?

研究代表者
鋤柄　増根（SUKIGARA, Masune）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：８０１４８１５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：自己報告式の心理検査得点に偏りをもたらす社会的望ましさが，成人と同様の影響を与えるようになるのはいつごろかを，前青年期(10歳～15歳)の児童・生徒とその母親359ペアに，気質質問紙EATQ-Rを実施することで検討した。児童・生徒の得点への社会的望ましさの影響の仕方は，年齢が上がるにしたがって，母親のそれに類似してくることが分かった。社会的望ましさは，ある文化の信念体系が内在化されたことの現われであると考えられるので，前青年期段階でこのような内在化が完了しだすことを心理検査における反応の偏りという観点からも明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
心理検査の領域では，安価で簡便に実施可能な自己報告式の質問紙が何歳くらいから実施可能であるかは，実用上重要な問題である。心理検査の得点を歪める社会的望ましさを補正することは，得点を解釈するときに必要となり，その補正方法に成人のものが利用可能なら，前青年期あるいは青年期に別の基準を従来作成していたものが不要になる。
発達の観点からすると文化の規範を内在化させる年齢段階を心理検査という観点からも明らかにできることができたことが重要である。

研究成果の概要（英文）：At what age will social desirability bias appear in scores of self-report psychological tests? To answer the question, early adolescents (from 10 to15 years old) and their mothers (359 pairs) were administrated the Early Adolescent Temperament Questionnaire-Revised. And also they rated social desirability of this test's items. The results showed that as age increased, a way of influencing social desirability bias on the scores of children have become to be similar to mothers'. Since social desirability is considered to be a manifestation of the internalization of a belief system in their culture, this research on the response bias in psychological tests also could indicate that the internalization emerges in early adolescent.

研究分野：心理測定

キーワード：心理検査　社会的望ましさ　前青年期　気質

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　自己報告式のパーソナリティ検査の回答は，さまざまな反応の偏り(response bias)によって歪められる。その代表的なものに黙従傾向，極端反応，社会的望ましさなどがあげられる。これらの反応の偏りは，臨床的には個人ごとに補正すべきであり，文化比較のような集団間の比較の場合には平均値レベルで影響が出ないように補正すればよい。場合によっては集団ごとにこのような偏りの補正を織り込んだ基準を作成すればよい。MMPI の青年期の基準がこれに当たる。反応の偏りを補正する方法は古くから考案され，現在も検討され続けている[登張(2007)を参照]。

(2)　気質の質問紙に関して，IBQ-R 日本版(中川・鋤柄，2005)，ECBQ 日本版(Sukigara, Nakagawa & Mizuno, 2015)，EATQ-R 日本版(鋤柄・古田・中川，2013)と適用年齢が下のものから順次，日本版を開発してきた。EATQ-R は前青年期(小 5 から中 3)を対象としており，自己報告式の気質尺度として，初めての年齢段階のものである。原版の開発者の研究（Ellis & Rothbart, 2001)でも，オランダの標本を対象とした Muris & Meesters (2009)の研究でも，前青年期の対象者自身とその保護者の両方に気質尺度を実施している。保護者に実施しているのは，本人の年齢段階では自己報告が可能なのか，可能であっても正確なのか不明であるためその点を確認する目的があった。その結果，いずれの研究でも，本人の評定と保護者の評定の間の相関は多くが.3 台であり，両者の間に一致は見られなかった。この理由を探る必要があった。

２．研究の目的

自己報告式のパーソナリティ検査における反応の偏りである社会的望ましさが，前青年期の本人と彼らの保護者の評価のズレの主な要因と考えて，年齢による社会的望ましさの影響の違いを検討した。ここでは，社会的望ましさは，その個人が所属している文化の信念体系の内在化の程度に依存すると仮定している。つまり，内在化された信念体系がパーソナリティ検査の得点に無意図的に影響する反応の偏りを，社会的望ましさによる偏りととらえることができる。したがって，この内在化が何歳になれば成人と同じようになるのかを明らかにすることで，保護者の評定とのズレがなぜ生起し，そのズレが小さくなっていく発達過程も明らかにできる。この点を明らかにするために，次の 2 つの研究を行った。

いずれも，前青年期を対象とした気質質問紙 Revision of the Early Adolescence Temperament Questionnaire (EATQ-R; Ellis & Rothbart, 2001)の日本版(鋤柄・古田・中川, 2013)を使用した。また，感情などの自己開示の程度が，気質の望ましさなどの文化的な価値に関する保護者との認識の違いを検討するために感情の自己開示の程度と Faking の程度についても調べた。

研究の(1)では，教育実践の観点から社会的望ましさを検討した。前青年期の児童・生徒が持ちやすい否定的感情を制御することは，教育現場では重要な社会的スキルと考えられている。この制御に関連する気質次元が"Effortful Control"である。成人(保護者・教師)と児童・生徒との間で，この気質の重要性の認識が異なるとするなら，育成しようとする側と学ぼうとする側で何を学べばいいのかについてその認識にズレが生じる。このようなズレは，文化の信念体系の内在化の程度の違いに起因すると考えられる。この内在化の違いが，社会的望ましさの影響の違いとして，質問紙の回答への偏りをもたらすと考えられる。この点を，気質次元の"Effortful Control"を中心に，成人と児童・生徒との間で何が重要な気質・スキルなのかの認識の違いを，感情の開示と気質特性への社会的望ましさから検討した。研究(2)では，短縮版を使い項目レベルでの社会的望ましさから，気質の下位尺度の社会的望ましさを広く検討した。

３．研究の方法

方法(1)

調査協力者　小学 4 年から中学 3 年までの児童・生徒とその母親 252 ペア。小 4(41 人，男 23: 女 18)，小 5(40 人，18:22)，小 6（41 人，20:21)，中 1（40 人，20:20)，中 2(44 人，25:19)，中 3(:46 人，21:25)。

調査用紙　表 1 に示すように，「悲しい」「うれしい」「怒り」という感情の開示程度と，自分を「よく見せる」「悪く見せる」程度を，「4: いつもする」から「1: まったくしない」の 4 件法で質問した。児童・生徒には自身の開示の程度，母親には子どもの開示程度を質問した。また，EATQ の 12 の気質次元の定義を質問項目として，その社会的望ましさを「6: 非常に望ましい」から「1: まったく望ましくない」の 6 件法で質問した。児童・生徒には「次のような特徴を持っていると，周りの人(親，学校の先生，友だちなど)はどのくらい望ましいと感じるでしょうか？当てはまるところに○をつけてください」，母親には「次のような特徴を持っている子どもは，周りの人(親，学校の先生，友だちなど)からどのくらい望ましいとみられているでしょうか？当てはまるところに○をつけてください。」と教示した。

手続き　日本能率協会総合研究所のアンケートモニターを活用し，372 名に FAX 調査を実施し，252 ペア(回収率 68%)から回答を得た。

方法(2)

調査協力者　10 歳から 15 歳(小学 5 年から中学 3 年)までの児童・生徒とその母親 359 ペア。10 歳(21 人，男 12:女 9)，11 歳(76 人, 34:42)，12 歳(80 人, 33:47)，13 歳(67 人，37:30)，14 歳(73 人，39:34)，15 歳(42 人，20:22)。

調査　EATQ の 12 の下位尺度から，児童・生徒版と養育者版のいずれにも存在する Activation Control, Attention, Inhibitory Control, Affiliation, Aggression, High Intensity Pleasure, Fear, Shyness から 3 項目，Depressive Mood, Frustration から 2 項目(DM と Fr)を短縮版として採用した。項目の選択は，鋤柄・古田・中川(2013)の結果を因子分析し，負荷量の大きい順に，項目内容が親子でほぼ同じものを選択した。さらに「悲しい」「うれしい」「怒り」という感情をどの程度開示しているか，自分を「よく見せる」「悪く見せる」程度を質問した。児童・生徒本人には自身の開示の程度を，母親にはどの程度子どもが開示してくれているかを質問した。その 1 週間後に気質の項目に関して，どの程度社会的に望ましいかを質問した。いずれも 4 段階評定である。
手続　日本能率協会総合研究所のアンケートモニターを活用し，FAX 調査にて実施した。
調査時期　2017 年 11 月 8 日～15 日(1 回目)，11 月 22 日～28 日(2 回目)

４．研究成果

結果(1)　図 1 に感情(Sad, Happy, Angry)の開示の程度と「よく(good)」あるいは「悪く(bad)」見せかける程度を各学年別の平均評定値と母親の平均評定値を示す。また，図 2 に否定的感情の制御，あるいはもっと一般的に自己制御に関連の強いと考えられる"Effortful Control"を構成する気質(AC: Activation Control, At: Attention, IC: Inhibitory Control)についての社会的望ましさを，母親と学年別の平均値を示す。感情の開示は，学年が上がるにつれて少なくなっている。また，児童・生徒が開示して思っているより，母親はもっと開示していると認識しているといえる。また，自分を「よく」みせかかけたり「悪く」見せかけたりすることは，学年が上がるにしたがい増えているが，母親が思っているよりは少ないといえる(図 1)。また，自己制御に関連する気質に関しても，母親が望ましいと思っているほどには，子どもは思っていないことが明らかになっている(図 2)。

これらのことは，教師に代表される大人が重視していることと，児童・生徒が重視していることとが異なることを示している。また，児童・生徒は自分のことを必ずしも正直に教師に開示してないにもかかわらず，教師は十分把握していると認識しているとすると，そのずれは重大な問題になりうる。学級集団における適切な社会的スキルの習得を目的としたプログラム(例えば，いじめの予防教育プログラムなど)を効果的に行うには，この認識の違いを念頭に置いたプログラム作成と実施が必要になる。

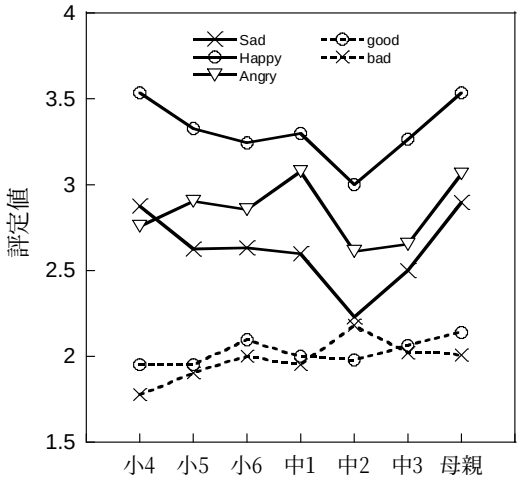

図 1　開示（Sad, Happy, Angry）の程度と見せかける傾向(good, bad)。評価値が高いほどそれぞれの傾向が高い。

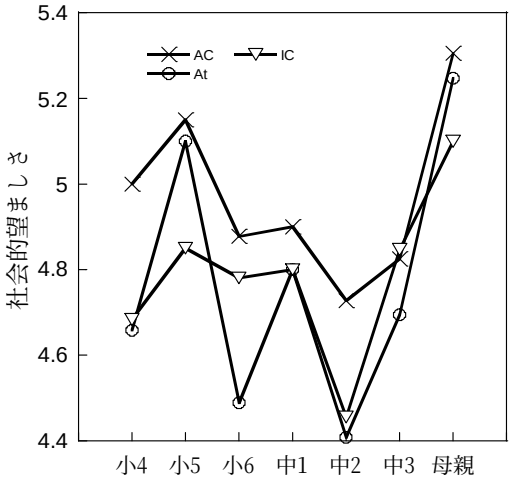

図 2　Effortful Control の下位尺度の社会的望ましさ。

結果(2)　年齢段階を 10 から 11 歳，12 から 13 歳，14 歳から 15 歳の 3 段階に分け，各尺度に属する項目の社会的望ましさ評定の加算平均を，児童・生徒と母親それぞれに求めた。各年齢段階ごとの社会的望ましさの平均を表 1 に示す，また，各年齢段階ごとの社会的望ましさについての児童･生徒と母親の相関が表 2 の r 列に示されている。High Intensity Pleasure と Depressive Mood 以外は，年齢が上がるに従い相関の値が大きくなっており，年齢に伴って，母親と児童・生徒の社会的望ましさの評価は類似してくるといえる。おなじく，Faking についても同様の相関を求めたが，Faking Good の傾向は次第に母親の子どもの評価とは関係なくなり，Faking Bad の傾向は関連が少しずつ強くなっている。

つぎに，児童・生徒の社会的望ましさの評価を被説明変数，年齢，自己開示傾向(3 つの感情についての評定の加算平均)，Faking 傾向(Faking Good と Faking Bad の加算平均)，母親の社会的望ましさ評価を独立変数とした重回帰分析を実施した。年齢によって母親の社会的望ましさの影響が異なるかを検討するために，児童･生徒の年齢と母親の評定の交互作用も検討したが，Affiliation 尺度のみにこの交互作用は認められた。したがって，表 2 は Affiliation 以外は主効果

のみを投入した分析結果を示す。いずれの尺度も，母親の社会的望ましさ評価が児童・生徒の社会的望ましさに大きく影響しており，養育者の信念体系を内在化していることを示唆してる。しかし，その影響の強さは，年齢による違いはないと言える。Affiliation に関しては，13 と 14 歳のみがこの影響が有意であり，年齢による違いが見られた。また，自己開示傾向が有意な効果を持っていたのは，Activation Control, Inhibitory Control, Affiliation, Aggression, Fear であり，因果の方向は不明であるが，自己開示してもいいと考える個人は，それぞれの特性を社会的に望ましいと評価したといえる。Depressive Mood 尺度のみで，Faking 傾向が有意な正の効果を持ち，Faking 傾向の高い人は，抑うつ気分を社会的望ましいと考える傾向にあるといえる。

児童・生徒の尺度得点は，本人の社会的望ましさと.23(Activation Control, Frustration)から.50(Af)の範囲で相関し，母親のそれとはほとんど相関(Activation Control, Frustration の.07 から Shyness の.24)していない。つまり得点には母親の社会的望ましさは影響していない。

開示の程度と偽装的な回答の間の関連を検討するために，「悲しい(Sad)」「うれしい(Happy)」「怒り(Angry)」という感情をどの程度開示しているかと自分を「よく見せる」「悪く見せる」程度の 5 項目について最尤法による因子分析(プロマックス回転)を実施した。なお，相関はポリコリック相関を利用した。表 3 の左半分に，因子分析結果，ポリコリック相関の値は右半分に示した。因子分析の結果，開示と偽装は別の因子であり，自己開示と偽装的な回答をすることとは異なる反応であることを示唆している。

表 1　年齢別の各尺度の社会的望ましさと Faking（Good と Bad)それぞれの平均(SD)

	Children's Age			
Scale	10-11(N=96)	12-13(N=147)	14-15(N=115)	Mother
ActivationControl	3.10(0.58)	3.09(0.64)	2.93(0.71)	3.23(0.49)
Attention	2.90(0.61)	2.96(0.54)	2.78(0.62)	3.17(0.41)
InhibitoryControl	3.18(0.59)	3.21(0.49)	3.14(0.57)	3.25(0.47)
Affiliation	2.98(0.59)	2.95(0.53)	2.94(0.49)	3.22(0.44)
Aggression	1.68(0.68)	1.65(0.52)	1.76(0.64)	1.58(0.47)
DepressiveMood	1.57(0.54)	1.60(0.57)	1.75(0.56)	1.70(0.42)
HighIntensityPleasure	2.27(0.76)	2.34(0.66)	2.33(0.63)	2.19(0.51)
Fear	2.46(0.59)	2.31(0.55)	2.29(0.57)	2.45(0.44)
Shyness	2.21(0.67)	2.22(0.71)	2.30(0.66)	2.11(0.43)
Frustration	2.05(0.77)	2.06(0.65)	2.16(0.71)	1.96(0.48)
Good	2.09(0.90)	2.14(0.77)	1.89(0.73)	2.22(0.70)
Bad	1.78(0.78)	2.08(0.75)	2.10(0.83)	2.01(0.66)

表 2　年齢別の各尺度の社会的望ましさと Faking（Good と Bad）について児童・生徒と母親評定間の相関(r)と各尺度得点を被説明変数とした重回帰分析の標準偏回帰係数 (β)

	r								
	Age Group								
Scale	10-11	12-13	14-15	β					
	(N=97)	(N=147)	(N=115)	Age	Disclose	Faking	SD[a)]	Age SD[b)]	R^2
ActivationControl	.26	.21	.48	-.08	.10*	.01	.32***	--	.11
Attention	.16	.30	.46	-.04	.06	-.06	.33***	--	.11
InhibitoryControl	.20	.24	.45	-.03	.16**	-.06	.30***	--	.11
Affiliation	.19	.23	.29	-.01	.18***	.03	.25***	.12**	.10
Aggression	.28	.23	.31	.04	-.12*	.08	.26***	--	.08
DepressiveMood	.32	.34	.27	.11*	-.08	.13*	.29***	--	.12
HighIntensityPleasure	.18	.37	.18	-.01	-.05	.01	.25***	--	.05
Fear	.09	.26	.19	-.10	.14**	.01	.18***	--	.06
Shyness	.25	.43	.43	.05	-.01	-.05	.38***	--	.14
Frustration	.06	.24	.30	.04	-.10	.06	.21***	--	.05
Good	.42	.23	.10	***: p < .001, ** : p < .05, *: p < .05					
Bad	.22	.36	.35						

Note: a) Mother’s Social Desirability, b) Interaction between Age and Mother’s Social Desirability

表 3　開示傾向と Faking(Good と Bad) についての因子分析
(最尤法，プロマックス回転)とポリコリック相関係数

	Factor		Polychoric Correlation			
	Disclose	Faking	Sad	Happy	Angry	Good
Happy	.773	-.070				
Angry	.836	.012	.61			
Sad	.797	.044	.67	.64		
FakingGood	.101	.352	.15	.10	.12	
FakingBad	-.170	.720	-.03	-.10	-.05	.24
r between factors	.139					

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計　2　件）
1．鋤柄増根・香月富士日・竹内浩・天谷祐子・久保田健市・中川敦子・山中亮　気質に対する社会的望ましさが母親と前青年期の児童生徒で異なるか　2016 **年** 9 **月　日本パーソナリティ心理学会第** 25 **回大会(大阪)**
2．鋤柄増根　社会的望ましさが心理検査に影響しだすのは何歳からか?　2018 **年** 9 **月　日本心理学会第** 82 **回大会**

６．研究組織
(1)研究分担者
なし
(2)研究協力者
なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。